

巡回型サテライト・オフィスの概要

北海道教育大学函館校 地域協働推進センター

社会協働部門 有 井 晴 香

【1】巡回型サテライト・オフィスとは

2018年より開始した巡回型サテライト・オフィス（以下「巡回SC」）事業は、今年、5年目の節目を迎えました。巡回SC事業では、道南地域の市町および北海道渡島・檜山振興局を訪問して意見交換の場を設け、地域課題・ニーズの把握に努めています。3年をかけて、道南に位置するすべての市町との意見交換が実現し、昨年度より2巡目に入りました。2022年度は、七飯町、長万部町、檜山振興局、福島町、渡島総合振興局の5か所をまわり、昨年度に引き続き「観光」および「教育」分野に焦点をあて、地域の課題やニーズについての意見交換をおこないました。

巡回SCは二部構成にて実施しており、会の前半では、大学から、函館校の地域協働活動の具体的な取り組み事例および教職大学院における人材育成について、附属函館中学校からICTを活用した遠隔授業や教員研修について紹介があります。また、地域協働に関わる実習科目を履修した学生からも報告をおこないます。会の後半では、地域の現状や課題について情報交換がおこなわれ、時間が足りなくなるほど活発に意見が交わされます。コロナ禍の終息が依然としてみられないなかでも、各地域に直接、訪問することができ、充実したものとなりました。

【2】巡回SCの意義

それぞれの地域ごとに、特色ある取り組みなどが紹介されたなかで、共通した課題としてあげられたものとして、コロナ禍の影響および少子高齢化への対応があります。いかに地域の人材を育てるか、いかに地域に人を呼び込むか、という点は大きな課題であるとともに、地方大学に期待される役割もあります。地域に資する優れた人材を育てていくことは、地域のみなさまとの連携なしには実現できません。

各会の実施後には、アンケートにご協力いただき、参加者のみなさまから率直なご感想を多数お寄せいただきました。全体的な感想としては、大学の取り組みについて深く知ることができた点、および専門家・学生からの意見を聞くことができる点についてとくに評価していただきました。巡回SCの意義として、地域と大学のつながりづくりという点もあげられており、今後も継続して活動していくことを通して、より一層密な連携をとっていくことが期待されます。また、人事異動が活発な自治体においては、数年単位で開催するよりも毎年開催することも検討してほしい、というようなご要望も寄せられました。



意見交換の様子
(令和4年9月26日・檜山振興局)



本学の取り組みを紹介する様子
(令和4年11月7日・渡島総合振興局)

【3】今後の課題と展望

一方で、巡回SCがどれくらい具体的な実践へと結びつけられるのかという点について、現段階では未知数である部分も多く、今後の展開が重要となってくることは言うまでもありません。来年には6年目を迎えることもあり、これまでの取り組みを見直しながら、より実りある実践的な協働を実現していくためのフローを検討していく必要があります。

また、巡回SCにおける意見交換の場では、学生の発言が求められる場面も多く、学生目線の発表や意見を提示できることを高く評価していただきました。少子高齢化がすすむなかで、若い世代の視点は、より一層貴重なものとして重視され、期待がかけられています。次世代の担い手として貢献していく可能性を感じる一方で、「若さ」だけが取り柄として取り出されている現状についても、目を向ける必要があるように思われます。地域の方々から「教育大生だからこそ、一緒に取り組みたい」と期待されるような持ち味を生かせる学生を育てていくためにも、より一層、地域との連携を強化し、充実した教育プログラムを展開していくことが求められているのではないでしょうか。

令和4年9月3日 函館新聞 3面

<p>七飯観光、教育で意見交換巡回型サテライト・オフィス</p> <p>【七飯】道教育大函館校 地域協働推進センターが主催するソーシャルクリニック「巡回型サテライト・オフィス」が8月29日、七飯町役場で開かれた。同校の教職員や学生、町職員ら計10人が参加し、観光と教育をテーマに意見を交わした。</p>	<p>七飯町で開かれた巡回型サテライト・オフィス</p> <p>ソーシャルクリニックは「地域課題の診療所」をイメージした同校独自の地域協働モデル。2018年から「アルコールツーリズム」を通じて、道南5市町と渡島・桧山の両振興局にセンターメンらが出向き、地元の課題を把握し、地域協働の可能性を探っている。始めに地域協働の取り組み事例として、同校国際協働グループ3年の前田晴香さん(21)が、街の魅力を観光客に伝える力などを育む科目「観光コンシェルジユ実習」での成果を発表。意見交換では七飯町の観光客増加に向け、同校側から「アルコールツーリズムを売り出すべき」「函館とは違った切り口のグルメタ</p>	<p>中村吉秀校長はICT教育の取り組みなどを紹介した。道教育大附属函館中学校の准教授は「観光客が増えるごみも増えてくる。營業活動は学生で何かできないか考えていいきたい」と述べた。(北川隼夢)</p>
--	--	--